

麻布大学第 15 回学術展示 「トラと家具? ~ロシア極東の森で今 起こっていること~」 展の記録

Records of Academic Exhibition of Azabu University, No. 15:
Tiger and Furniture? ~What is Happening to the Forest of Far East Russia~

原田 公¹, 三上雄己 (タイガフォーラム)²

¹麻布大学 生命・環境科学部, 国際コミュニケーション研究室

〒 252-5201 神奈川県相模原市中央区淵野辺 1-17-71

²株式会社 abovo 代表取締役

〒 105-0001 東京都港区虎ノ門 1-11-16 Hanz bldg., 2F

Akira Harada¹, Youki Mikami (Taigaforum)²

¹Office of International Communication, School of Life and Environmental Science, Azabu University
1-17-71, Fuchinobe, Chuo-ku, Sagami-hara, Kanagawa 252-5201, Japan

²Managing Director abovo Ltd. Hanz Bldg. 2F, 1-11-6 Toranomon, Minato-ku, Tokyo 105-0001, Japan

Abstract: The forests of the Russian Far East—known as the “Ussuri Taiga”—are being put in danger of disappearing due to rampant, large-scale illegal logging, largely to supply Chinese furniture and flooring manufacturers. A massive volume of their final products are flushed into the markets of the U.S., EU and Japan. Russian Far East as a part of Northeast Asia is located close to Japan though only a few of the Japanese people understand the closeness and much fewer know where their furniture is sourced from. In the exhibition, we aim to inform viewers of the vast biodiversity of “Ussuri Taiga” and the harmonious coexistence of the Udege indigenous people and critical habitat for the endangered Amur tiger.

要約：2014年5月20日（火）から2014年8月28日（木）までの期間で「トラと家具? ~ロシア極東の森で今起こっていること~」展を麻布大学獣医学部棟1階の学術展示スペースで行った。以下は、展示にコーディネーターとして関わった筆者と展示の企画・制作を担当されたタイガフォーラムの諸氏による記録である。

(1) はじめに：第 15 回学術展示の趣意

極東ロシアに未だに存在している原生の森、タイガ。この森で先住民族ウデへは長い間狩猟採集を続けてきた。このタイガは IUCN（国際自然保護連合）の報告書では「過去の氷河期とこの地域の気候・地形に

より、世界で最も豊かで類稀な温帯林が形成されている」と評価されている。そして、その豊さ故に、タイガを流れるビキン川中上流域は、アムールトラをはじめとする様々な動植物が生息・生育している「極東のアマゾン」とも呼ばれている。また、日本との繋がりも深く、最近の研究では、タイガで生成された栄養分

がオホーツク海に流れ出し、豊かな北洋漁場を作っていることが判ってきた。しかし、このタイガも、現代文明による森林破壊の危険性や開発などと常に隣り合わせである。今求められていることは、この森や人びと、いきものたちの存在を、ロシア国内のみならず国際的にも知らせていくことである。タイガフォーラムは、そんなタイガを森の住人ウデへの人々を通して知り、一緒に守っていきたくないと活動を続けている。この学術展示を通じて、タイガやそこに暮らす人びとへの想いを少しでも日本の皆さんと共有出来れば幸いである。この企画を実現してくださった高槻成紀先生へ深く感謝の意を表したい。

国際コミュニケーション研究室 原田 公
タイガフォーラム 三上雄己



図1 「トラと家具？」展全景



図2 トラの塑像と展示パネル

(2) 「タイガ」とは？

「タイガ」とは、ロシア語で森の意。主に北方の湿地針葉樹林帯を指す。その語源には様々な説があるが、一般的にはユーラシア北方民族の言葉であったと言われている。現在は、ロシアのみならず北米などにおいても、広く北方林 (boreal forest) のことを指す言葉でもある。極東ロシアのタイガには、針葉樹 (トマツ・エゾマツ・チョウセンゴヨウマツなど) と広葉樹 (タモ・ナラ・クルミなど) の温帯針広混交林が広がっている。他の温帯林と比べ、この地域に動植物の固有種が多いとされているのは、一説では、最終氷期時にこの地域が氷で覆われなかったため、多くの種の避難地になったからだという。ロシアの森林面積は、現在の地球上森林面積の20%以上を占める。そのため、今後、地域・国家・世界、それぞれのレベルで、環境的にも経済的にも重要な役割を果たすであろうと言われている。極東ロシアは、その中でも森林面積の高い地域であり、またロシア森林全体の3割以上を占め、一部残っている原生の針広混交林は生物多様性の側面からも非常に注目されている。

この展示で取り上げているのは、アムール川の上流支流にあたるビキン川中上流域であるが、絶滅を危惧されているトラの最大亜種アムールトラ (*Panthera tigris altaica*) や、この森に生息するもう一種の大型の肉食性の強い動物であるヒグマが生きていくのに十分な、アカシカやイノシシを始めとする大型草食動物やノロジカやニホンジカなど様々な草食動物を育てる豊かな森が存在している。しかし、人間の生活に利用される木材などの供給源として、この森も常に伐採の危機とは隣り合わせである。日本との繋がりとしては、特に60年代から70年代にかけての建築材需要に合わせて、直接ソビエト連邦から北洋材として大量に丸太が輸入された。現在は、ロシアの輸出規制に伴って、丸太輸入は激減したものの、中国経由で家具や材木として輸入されていると言われている。

(この項目 文責: タイガフォーラム)



図3 広葉樹が色づく「黄金の秋」
(画像提供:タイガフォーラム)



図4 冬の川は凍り付き動物と人の道路に変わる
(画像提供:タイガフォーラム)

(3) アムールトラ

アムールトラは、ネコ科に属するトラの一亜種。シベリアトラとも呼ばれる。現在は、ロシア極東の沿海地方およびハバロフスク地方のアムール川・ウスリー川流域が主な生息地だが、かつては中国・朝鮮半島・モンゴル・シベリアに広く分布していた。絶滅されたとされるカスピ海沿岸やイラン・アフガニスタン・パキスタン北部の山岳地帯にかけて分布していた別亜種カスピトラが、遺伝学的調査(1)では、アムールトラとほぼ同一であることが判明したことから、この種は中央アジアや西アジアまで生息していたと判明した(Driscoll C. A. et. al. 2009)。トラ種には、現在9つの亜種(ベンガル・アムール・アモイ・インドシナ・マレー・スマトラ・カスピ・バリ・ジャワ:カスピ・バリ・ジャワは絶滅)が確認されているが、アムールトラは、トラの亜種の中でも最大とされ、オスの大きいものでは、全長3m・300kg以上の個体も報告されている。最北に生息しており、毛は長くて深い。夏毛は背側の長さが1.5cm程で、色も赤黄色でベンガル

トラに似ている。冬毛になると4～5cm程の長さで綿のようになり、色も淡く鮮やかになる。首周りの毛は夏冬共にこれよりも長い。繁殖期と育児期を除き、基本的に単独で生活するトラに必要な縄張りは、アムールトラの場合、メスで250-450平方km、オスでは1385平方km(オスの場合は一部数匹のメスの縄張りと被ることもある)(Wildlife Conservation Society Russia)。

トラは20世紀初頭には地球上に10万頭いたと考えられているが、今では約3062-5066頭とされている(認定NPO法人トラ・ゾウ基金)。その生息域は最近100年間で9割以上が失われ、IUCN(国際自然保護連合)のレッドリストで「絶滅危惧種」に指定されている。減少の要因は、密猟(漢方薬、毛皮等)、生息地の減少(大規模開発、大規模伐採等)等である(WWF Japan)。1975年にワシントン条約によって絶滅の危機に瀕する動植物としてトラの取引が規制されるようになったが、今も密猟は絶えない。日本では2000年4月に「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」が改正され、トラを使用している医薬品の国内での製造・販売が全面的に禁止された。

森の生態系の頂点に立つ肉食動物のトラであるが、その存続には、大小の様々な動物を育てる豊かな森林の存在を始め、我々人間が共生を意識することが不可欠なのである。

(この項目 文責:タイガフォーラム)



図5 ヘリコプターから捉えた野生のアムールトラの家族
(画像提供:タイガフォーラム)

(4) 先住民族 ウデヘ

ウデヘは北方先住民族の一つ、満州ーツングース系に属していて、現在、総人口約2,000人とされている。主に沿海地方とハバロフスク地方に暮らし、川のそばで生活してきたとされ、住んでいる川にちなんで集団ごとにビキンウデヘやサマルガウデヘなどと呼ばれる。書き言葉はなかったとされ、シャーマニズムを信仰してきた。トラと共生してきた民としても知られている。

伝統的に狩猟、漁労、そして採集を生活の糧とし、主な食料は魚と野生動物の肉であった。ウデヘは牽引動物を持っていなかったが、長いスキーなどで、素早く旅をし、必要な時には自らそりを引っ張ることもあったと記録されている。中国人やロシア人との接触を持った集団は家庭菜園などを始めたが、魚と肉を主食とし、生で食べることを好んだ。沿海地方のウデヘは朝鮮人参も採集する。

ソビエト革命以前、ウデヘは森で小さな集団ごとに暮らしていた。その森を始めとした自然界との関わりの中で、ウデヘ文化には多くの神々と神話が存在する。しかし、ソビエト連邦時代になると病院や学校などを備えた村々への移住・定住を強制された。同時に彼らはロシア語を話すことも強制され、ウデヘ語とシャーマニズムは禁止された。その結果、現代のウデヘにおいては、自らの言語や伝統的文化を知るものは少ない。

ウデヘの伝統的な衣服にはあまり男女差がない。布製のゆったりしたローブ（ハラート）の下にズボン、短い革製のブーツを履く。頭には、革製の小さな帽子をかぶり、その下には綿やウールで出来た布を雨や雪除け、夏には虫除けとしてまとった。形は同じだが、女性服の方が長めに作られ、装飾も多めに施された。

ロシアに存在する多くの先住民族と同じく、社会的経済的に困難な状態が続いていると言われている。言葉や文化の衰退、出生率の低下や健康管理の問題も指摘されている。

(この項目 文責：タイガフォーラム)



図6 お祭りで民族衣装を着ている村の若者たち
(画像提供：タイガフォーラム)



図7 仕留めたノロジカをさばく猟師の兄弟
(画像提供：タイガフォーラム)

(5) わたしたちの暮らしに欠かせない 家具とロシアの森

普段の生活の中で当たり前のように使われている家具。昔は、桐たんすなどの木製家具は職人さんに修理をしてもらいながら代々家で受け継がれ大切に使われてきたものだが、いまでは近くの幹線道路沿いに立ち並ぶ大型量販店に行けば、格安でデザインにも優れた高機能の家具が気軽に手に入るようになった。ダイニングテーブルなど、引越しをするたびに買い替えるという消費スタイルへと変わってきたようだ。木製家具の世界ではこの10年で、海外で造られた輸入家具が大量に日本の市場に流入している。「国産家具」という認証制度が誕生するくらい日本の高い工芸技術に支えられた家具調度品は家具流通の傍流へと追い込まれてきたのだ。そして、「国産家具」もその部材や原木の多くは外国産だ。

日本で売られている輸入家具のもっとも大きな生産地は中国である。木製家具の場合、中国産は輸入全体の半分にもなる（金額ベース）。では、中国でつくられる家具の素材は中国国内の森林から来ているかというと、そうではない。中国では1980年代に森林枯渇が問題となり、政府の政策により伐採が厳しく制限されるようになった。中国での大量の家具生産を可能にしている木材の調達地のひとつはロシア極東の豊かな広葉樹の森である。ロシア極東で伐採されている貴重な広葉樹の木材は国境を越えて中国に運ばれている。そうした由来を持つ家具製品はアメリカやEU、そして日本の量販店のフローアやインターネットのカタログ用のサイトで売られている。

実際にロシア極東の広葉樹の森は今どうなっているのだろうか？ロシアを原産地とする広葉樹種の「ヤチダモ」(*Manchurian Ash; Fraxinus mandshurica*)とモンゴリナラ (*Mongolian oak; Quercus mongolica*)は2014年の6月にワシントン条約(CITES)の付属書3に登録されることが決まった(CITES, 2014)。沿海地方やハバロフスク地方の河川流域に生息しているアムールトラは現在、IUCNのレッドリストで危惧種(EN)に登録されている希少種で、その生存が危ぶまれている。野生動物や固有樹種がいかに危機に晒されているか、国際社会からも注視が必要な状況であることがわかる。

(この項目 文責: 原田)

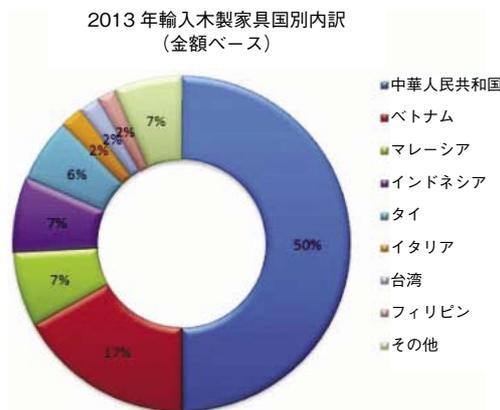


図8 輸入木製家具の国別内訳
(出典: 貿易統計)



図9 タモを使用した中国製のイスとサイドテーブル

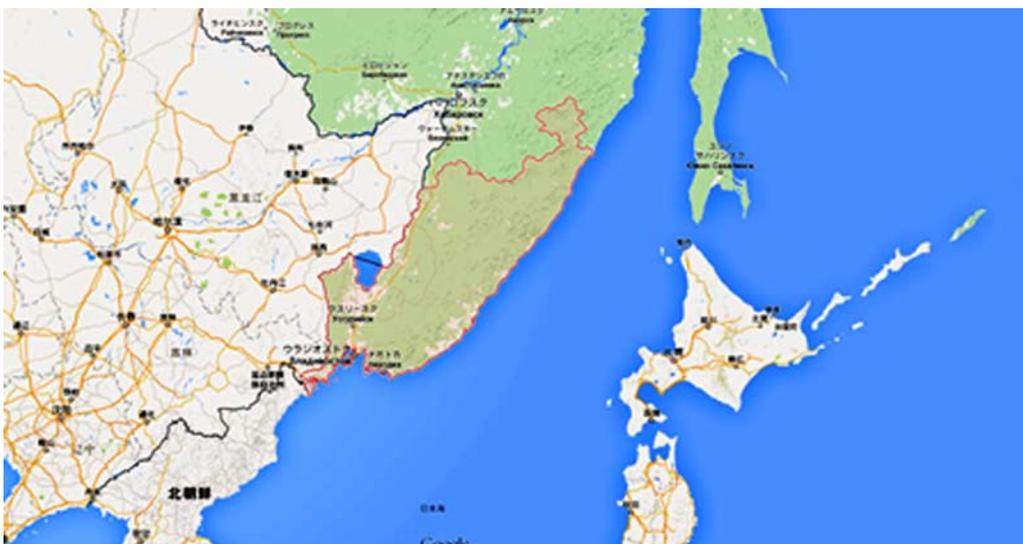


図10 ロシア沿海地方(赤い枠線) 出典: Google Map



図11 第15回学術展示ポスター

■最後に

この15回学術展示に関しては、もっぱら筆者は裏方に徹した次第で、タイガフォーラムの協働なしには実現できませんでした。あらためて三上雄己、木村輝一郎、野口栄一郎、坂本有希の四氏に感謝の気持ちを伝えたいと思います。

References:

- CITES. 2014. CITES extends legal controls on high-value timber at the request of Nicaragua and Russian Federation, accessed 12 August 2015, < https://cites.org/eng/CITES_extends_legal_controls_on_high-value_timber >
- Driscoll C. A. et. al. 2009, Mitochondrial Phylogeography illuminates the origin of the extinct Caspian Tiger and its relationship to the Amur Tiger.
- Japan Tiger and Elephant Fund. 「トラの個体数」, accessed 12 August 2015, < http://www.jtef.jp/showcase_tiger_05.html >
- Russian Federation, accessed 12 August 2015, < https://cites.org/eng/CITES_extends_legal_controls_on_high-value_timber >
- Wildlife Conservation Society Russia. The Amur Tiger: Ecology, accessed 12 August 2015, < <http://www.wcsrussia.org/en-us/wildlife/amurtigers/ecology.aspx> >